

武蔵野日曜聖書講筵

終末的希望

――詩篇第130篇――

1976年6月20日

小池辰雄

深淵より アウグスティヌスの『懺悔録(告白)』 母モニカ 息子アデオダトウス マニ教に
没頭 恵みのみ(ソラ・グラティア) 「トレ・レゲ」(取りて読め) 十字架の船 キリストの
本願の効力 畏れかしこむ 神の恩寵を与える管 終末的希望 パウロ的神秘 祈り

【詩篇130】

みやこ 京もうでの歌。

1 主よわれふかき淵より汝をよべり。

2 主よねがわくはわが声をきき、

汝のみみをわが懇求のこえにかたぶけたまえ。

3 主よなんじ若もろもろの不義に目をとめたまわば、

主よ誰かよく立つことをえん。

4 されどなんじに赦あれば

人にかしこまれ給うべし。

5 我主を俟望む。わが靈魂はまちのぞむ。

われはその聖言によりて望みをいだく。

6 わがたましひは衛士があしたを待つにまさり、

誠にえじが日をまつにまさりて主をまてり。

7 イスラエルよ主によりて望みをいだけ。

そは主にいつしみあり、

またゆたかなる救贖あればなり。

8 主はイスラエルをそのすべての不義より

あがないたまわん。

●深淵より

今日は詩篇130篇。短い詩篇で、巡礼の歌です。

1 主よわれふかき淵より汝をよべり。

素晴らしい詩篇です。これは、



「深淵より」(de profundis)
デ・プロフンディス
 といって、

「深みより」(aus der Tiefe)
アウスデア・ティーフエ

という。マルチン・ルターの讃美歌にもこの詩篇130篇を土台にして作ったのがある。ルターもこの詩篇が好きだったし、アウグスティヌスもこれを愛読していました。

この「深き淵より」と。ヘブライ語では「アガマツキーム」というただ一字です。神さまに向かつて叫ぶ。「呼ぶ」という字も、「カラー」という「叫ぶ」と字です。

「深淵から叫ぶ」

ということとは、いろいろな場合にあるわけで、人間の、

ゲヴォルフエネス・ザイン
 「geworfenes Sein」(投ぜられた存在)

といいますが、ハイデッガー式にいうと、「投ぜられたる場所」というのは突き詰めてみると、みな本当は「深き淵」なんです。そこから叫ぶ。

東西の宗教家がこの救いに入るひとつの転換の場所は、みなこの深き淵という表現でいわれるような場であります。パウロがローマ書7章で叫んでいるのもそうです。

「ああ噫われ悩める人なるかな、此の死の体より我を救わん者は誰ぞや。」(ロマ

7・24)

と。これはまさに深き淵からの叫びです。あるいは、いろいろな艱難の場においても深き淵から叫ぶ。著作集第二巻(『芸術のたましい』1976年刊)に出てくるダンテあたりもまさにそうです。

●アウグスティヌスの『懺悔録(告白)』

今日は、ひとつのサンプルとして、アウグスティヌスのお話を多少いたします。詳しく言ったら、とても大変ですから。

アウグスティヌスの『告白』(コンフエッシオーネス Confessiones)は、

ジャン・ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau 1712～1778) と

レフ・トルストイ (Lev Nikolayevich Tolstoy 1828～1910) と

アウグスティヌス (Aurelius Augustinus 354～430)

の三人がみな「コンフエッション」(confession)を書きましたが、それは桁違いにアウグスティヌスの『懺悔録(告白録)』が一番です。もうこれに比するものはないといっていいたいのものです。

これはぜひ、キリスト教の古典のひとつとして絶対に読まねばならない本です。ことに終わりの方に出てくる「時間の問題」でアウグスティヌスくらい掘り下げた人は、その前にいないし後でもそうはいない。それくらい非常にアウグスティヌスは思索家でもある。

プロテスタントとカトリックの両方の――アウグスティヌスはカトリックの流れですけ



れども——これからプロテスタントとカトリックがなお流れ出たと言っているくらいで、マルチン・ルター(1483～1546)もアウグスティヌスがなければ考えられないといつてもいいくらいに、アウグスティヌスの影響を受けています。ブルンナーが、

「アウグスティヌスはキリスト教界における世界最大の神学者だ」

と言っています。ルターよりも非常にその内容は幅がある。哲学者としても宗教哲学者としても。とにかく真理探求で非常にあちらこちらといろいろな、それまでの思想的なものはおそらくみんな読んでしまったでしょう。とてもでかい人物です。それですから、プロテスタントの人もアウグスティヌスをいい加減に取り扱うことがいかなない。

●母モニカ

彼は354年11月13日、ヌミディアのタガステ(Thagaste)という所で生まれました。北アフリカのカルタゴ、ナイル河の内側200km位のところがタガステ。これは今はフランス領ですが、その当時はローマ領です。

彼の父親はパトリキウス(Patricius)といって異教徒です。母親は有名なモニカ(Monica 387)です。だいたい偉い人の母親というものは魂がいいです。ほとんど例外がないですね。お父さんが偉い人という、子どもが馬鹿がいますけれども(笑)、必ずしも父の具合にはいかならない。お母さんの場合は、お母さん魂の質がいいと——息子が全部いいわけではないけれども——素晴らしい人のお母さんはほとんど、ダメなお母さんをまだ聞いたことがないね。その意味においては女性が歴史をつくっているわけです。

モニカは——とにかくアウグスティヌスは若いときに相当な脱線居士でもあったんだよ——だから手をやいて、母の涙が絶えなかったといつては大袈裟だけれども。それで監督に聞いて、悩みをモニカが訴えたら、

「安心してお帰りなさい。あなたの涙の子は決して失せることはありませんよ」

と言って慰めた。母親は敬虔な祈りの人。父親は信仰がない。最後には回心しましたが。

●息子アデオダトゥス

生涯の経路を今ここで話してみてもしょうがないですが、カルタゴは当時の大貿易港であり、また文明文化都市であって、そこへ彼は勉強にやらされるわけです。ところが、カルタゴはまた非常に当時の、東京みたいな所で、いわゆる大都会だものだからいろいろな誘惑がある。男女間も相当いわゆるフリーセックス式なところがある。

アウグスティヌスもその誘惑に引っかかり、ある婦人と同棲してしまった。内縁の関係で子どもが生まれてしまったわけです。その子どもの名前が、

アデオダトゥス(Adeodatus 372～388)、「神に与えられたる者」(フォン・ゴット・ゲデーベネル)、「神の賜物」



であると――彼は真面目なんだね、そういうところは――そういう名前をつけた。アデオ
ダトウスとは素晴らしい名前です。

彼はしかし真理探求に、多情な人だけれども、また非常に知識欲が旺盛です。また情感
の豊かな人ですが。19歳のときに、キケロ (Cicero) の『ホルテンティウス』 (Hortentius)
という本を読んだ。キケロはローマの思想家です。ホルテンティウスは人の名前です。こ
のホルテンティウスについてキケロが書いたものです。ホルテンティウスは修辞学 (レトリッ
ク) の素晴らしい人だったらしい。それで、哲学への愛 (フィロソフィア)、知への愛がいよ
いよもって彼はかきたてられる。

「いったい真理とは何だ、究極の真理とは何だ」

ということが、アウグスティヌスのいつも彼の問題である。真理に対する憧憬とその探求
です。

ところが、母親からは聖書の話はとにかく聞いています。小さいときに聞いた聖
書のことがやはり彼の魂の奥に消えないわけです。それでホルテンティウスでも少し飽き
足らなくなつて、ひとつ聖書を読んでみようということになった。聖書を読むというど
うも非常に、言っていることが非合理的なんだよな――超合理ということはまだ分からな
い――非合理的に非論理的であるというので、なかなか聖書が読みにくいわけです。とい
うのは、頭のいい人というのとはかく理論的にものごとを考えるから、論理に反するよう
なことはなかなか承服できないわけです。非常に主知的な面がある。

●マニ教に没頭

そうこうしているうちに、マニケイズム (マニ教) ――3世紀頃にペルシャに起こった宗
教ですが――マニ教は二元論的なんです。これは光と闇、神と悪魔、善と悪、その闘い
の事態が出ているわけです。現世のこの矛盾に対して、この二元論的な考え方というもの
はかなり彼に、

「どうも現実を見るとそうだ」

というわけで、マニ教に相当とらえられる。9年間マニ教に没頭する。けれどもしかし、
聖書の中にももちろん光と闇があるし、善と悪の闘いがある。それで、このマニ教によって、
またその考え方によって、聖書にまた戻るわけです。そうすると今度は、マニ教よりも聖
書はもっと深いということにだんだん気がついてきた。

しかしながら、彼は聖書の解釈の仕方において、カトリック的な伝統的な解釈がどうも
気に入らない。それで、もっと自分でもって自由にこれをなんとかかまえないという気
持を彼は持っていた。そういうことで、多少、聖書に戻ってきたことは、母親も喜んでい
る兆しが出てきたんですが、彼はしかし、もはやここでは求めるところがないと、今度はロー
マに出かけて行く。



ローマに行きまして、それから更に北の方のミラノに行く。これが彼の転換の場所になるわけです。アンブロシウス (Ambrosius 340? ~ 397) という宗教家でした。その当時は、アンブロシウス、ヒエロニムス (Eusebius Sophronius Hieronymus 347頃 ~ 420) ——ヒエロニムスはパレスティナにいる。彼は非常に語学ができる人で、有名なウルガータ (Vulgata)、ヘブライ語聖書のギリシヤ語訳からラテン語に訳した。今でもヒエロニムスのウルガータは、ラテン語訳の聖書はカトリックの方の土台になっているわけです。それから、グレゴリウス大帝 (Gregorius D) とアウグスティヌス。当時の四大人物は、アンブロシウス、ヒエロニムス、グレゴリウスとアウグスティヌス。もちろんアウグスティヌスが最大ですけども。アウグスティヌスが直接遭ったのがアンブロシウス。この人につきまして、初めて聖書への本当の目が開かれるわけです。

一方、カルタゴで知り合った恋人、アデオダートウスのお母さんが息子を連れてやってくる。けれども、アウグスティヌスの母親は、許してやればよいのに、その関係を認めないで、それでとうとう帰されてしまう。その点はちよつと気の毒に思うのですが。そして、母親の選ぶ別なひと一緒にさせようとするけれども、アウグスティヌスはついにそうならないで、彼はあと独身を貫く。

●恵みのみ (ソラ・グラティア)

ミラノにおいていろいろなことがありますが、特に今はその「深淵より」ということで、アウグスティヌスの一番の悩みは、やはり女性に対する彼の傾倒の気持がなかなか抜けなわけです。それで、何とかして——それが神への愛、キリストへの愛というものと両立しない——これから抜け出たいというのが彼の悩みであった。真理が聖書にあるということとははつきりとしてきた。

そして、キリストへの「恵み」(グラティア)、キリストの恵み。アウグスティヌスにとっては、

「恵みのみ」(ソラ・グラティア *Sola gratia*)

で、マルチン・ルターにとつては、

「信仰のみ」(ソラ・フィデ *Sola fide*)

です。実は、「恵み」の方が元ですけども。「信仰」は、何を信ずるかというのと、「恵み」を受けとることなんです。アウグスティヌスほど恵みを徹底的に言つたひとはない。このキリストの恵みに本当に彼は捕まえられたから。その捕まえられる前に、どうしても自分に彼は打ち勝たなければならぬ。

パウロは、意志的な人間だから、この自分の意志に勝たなければならぬ。意志を殺さなくては。それから、知的な人間は、この知に勝たなくてはならない。情的人間はこの情に打ち勝たなくてはいいかん。「知・情・意」といいますね。いろいろ人間には型があるから。それぞれみな持っています。持っているけれども、特にその人において強いものは何かと



いうと、この三通りあるでしょうね。

アウグスティヌスは知と情が優れている。両方とも優れている。知の面では、ついにこの知をのり超えた超越の、超知の世界に、

「エピグノーシス」(epignosis)

の世界に入る。即ち、聖書は非合理ではなくて、超合理の驚くべき世界だということに気がつくわけです。けれども、彼自身の、人間としての情に打ち勝たなくてはいかん。これがしよっちゅうつきまといっている。これは悪くはない、どれだって。悪くはないけれども、それが中心になって、神さまの方とバランスがとれなくなる。それで苦しむ。彼の「深淵」というのはこの情の深淵だ。藤井先生もアウグスティヌスについて、そのことを書いていますけれども。

●「トレ・レゲ」(取りて読め)

アントニウス (Antonius 251頃～356) という修道僧がいた。彼より少し前にアフリカにいた修道僧で、修道僧の最初の人といっているくらいの人です。この人が本当に自分に打ち勝って修道僧として神につかえる。友だちからその伝記を聞いたわけだ。アウグスティヌスはこれに非常に感銘した。

「私もなんとかしてアントニウスみたいになりたい」

と。かなりそれで気持ちが動いてきたのだけれども、なおダメだと。彼は友だちと一緒にそれに非常に感銘したのだけれども、自分はどうしても苦しい。そこらへんは『コンフェシヨン』(告白) に詳しく書いてあるので読んでください。

それでそこを去って、自分一人いちじくの木の下に行って、滝の如くに涙が流れたと書いてある。

「もう私はどうにもならん、まさにわれ悩める人なるかな」

と。そうしていると、子どもが歌を唄っているのが聞こえた。その歌の中に、

「トレ・レゲ」(Tolle, lege)

という言葉が聞こえてきた。「トレ・レゲ」(取りて読め) という言葉が聞こえて、彼はハッと思つて、もとの所へ戻つて——友達と一緒にそこに聖書があつた——聖書をパツと開いた。最初に目についたのがローマ書13章13～14節。これがアウグスティヌスのコンバーション、回心の要の文句なんです。まさにアウグスティヌスに示された天の文字です。

「昼のごとく正しく歩みて宴樂・酔酒に、淫樂・好色に、争闘・嫉妬に歩むべきに非ず。ただ汝ら主イエス・キリストを衣よ、肉の欲のために備えすな。」(ロ

マ13・13～14)

この13章13節、14節を読んで、彼はもうその先を読む必要がなかった。これは電光の如くに彼に閃き、また彼の魂にしみこみ、揺り動かした。それで彼は俄然として回心し、自



分の情の世界に打ち勝った。それで、母の勧める女性とも結婚しない。彼はあとアントニウスと同じように独身で貫く。これがまだ30何歳のときです。

それから35年間——人生の旅路半ばというのは35歳ですから——死に至るまで、今度はミラノから引きあげて、ヒッポという、アフリカの故郷に近い所で、その監督となって、聖書の講義（旧新約聖書全部）をした。それと、「神の国」（*civitas Dei*）^{キビタス・デイ}についてという大論説、全20巻です。もちろん、彼はプラトン、アリストテレスを全部勉強していますよ、前に哲学のときに。それから、聖書。もう大思想家ですから。

●十字架の船

彼は自分がこうなったのはキリストの恵みだ、罪の赦しだと。

「恵みのみ」（ソラ・グラティア）

という。『三位一体論』（トリニターテ）という本の中に、おもしろいことが書いてある。地上の旅路を航海に例えて、海を越えて別な彼岸の国へ行く。そして、

「自分の乗っている船はキリストの十字架で造られている。罪の贖いの事実であるキリストの十字架を素材として造られている」

ということが書いてある。これは非常に注目すべき言葉なんです。アウグスティヌスにとつては、罪の赦しの土台がこの十字架である。そして、天津風^{あまつ}を受けて、満帆^{まんぱん}に風を受けて進んで行く。その天津風は——もちろん、私に言わせると聖霊であります、そこではそう書いてないけれども——これは御霊の風。どこへ向かって行くかという、それは昼は太陽が招いている。夜は星が招いている。昼は太陽となり、夜は星となる——これはアウグスティヌスが言っているのではなく、私が言っているのですが——神さまはその彼岸の国へ導いてくださる。即ち、

「神・聖霊・キリスト」

で、この「トリニターテ」——アウグスティヌスの本の名前に即して私はそう解釈するわけだ——

「三位一体」（Trinitas）

となつてこの私たちを導いてくださる。その方舟^{はこぶね}がまさに、この十字架を素材として造つたなんて、まだ誰も考えたことがないことを彼は言った。

そういうことで、十字架によるところの罪の贖い。アウグスティヌスは詩篇32篇の、

「その罪をゆるされたる者、その咎^{とが}をおおわれたる者は福^{さいわい}なり」

という、この言葉が彼は大好きだった。死のときに壁にこの言葉を掲げてそれを眺めているというはなしです。



●キリストの本願の効力

このアウグスティヌスはカトリックでは聖者の中に数えられている。まあ、アウグスティヌスが触れたのは決してただ一人の女性ではないけれども、そんなことは言う必要はない。パウロは意志的な人間だから、「この野郎！」というわけで人を殺したりした。いろいろ偉大な人間というものは矛盾したものを持つてゐる。

そいつにどうして勝つていったか。そして本当にどのようなようにして救われていったか。これはもうキリストの力の他にないです、彼らを勝たしめたものは。パウロはキリストにひっくり返された。なんといつても、「信仰のみ」と言おうが、「恵みのみ」と言おうが、これは恵信一如です。恵みが土台。そして彼らは真に本当に終わりに至るまで忠実である。

「死に至るまで忠実」(トロイ ビス ツム シュテルベン)

という。「ピステイス」信実、信仰。ドイツ人は「Treue」(信実、忠実)という言葉を非常に重んずる。裏切り行為は最もいかん。絶対的な「グラティア」(恵みのみ)によつて——それが本願の恵みだから。

「本願の効力」

という言葉が私は大好きですが、キリストの本願の効力によつて——彼は本当にキリストへの信実を貫く。

中世の神秘主義には、へたをすると十字架抜きがある。「へたをすると」ではない、かなりある。十字架抜きの神秘主義で、キリストとの合一。神でなくてキリストでもいいですよ。合一は信仰の構造からいうと——本当でないとは言いませんけれども——愛が直接的な愛になる。一種の恋愛になる。相手がキリストでも。そういう尼さんたちがいました。

どこまでも、

「神—キリスト—我」

との関係における愛というものは、罪の贖いということが土台となっていないければ、本当の意味で健全でない。十字架が如何に必要であるか、ということはそのことです。

十字架の贖い。要するに自己を主張するものは、それが情であろうと、知であろうと、意志であろうと、自己中心のものは皆、これが片づけられるためには、自分ではダメなんだ。十字架がそれを片づけてくれる。そこを通らないと、その次に

「キリストと合一する」

といいましても、いつペンそこを通っていないものは、これが一種の直接的神秘主義になるから。相手がキリストであろうとも、あるいは神さまでであろうとも。

「キリストならいいじゃないか」

と。ちよつとどっこい、そうはいかん。ということは、人間そのものの直接肯定になつてゐるから、そいつが。その意味においては、へたをすると、霊的な人たちがこの過ちを犯す。非常に結構なんだけれども、



「キリストの十字架の土台が本当にあるか」
 ということが大事なんです。それでないと、人間はへたすると、浮いてしまっし、へたするとサタンの方に囚われる。

●畏れかしこむ

4 されどなんじに赦あれば

人にかしこまれ給うべし。

口語訳では、

「しかし、あなたには赦しがあるので、人に畏れかしこまれるでしょう。」

ヘブライ語はこのところは非常にはつきりしている。

「けれども、汝のもとにはゆるし」

「あり」という言葉もない。「汝のもとには」、定冠詞がついて「ゆるし」と。それは

「汝が畏れ畏まれるために」

という言い方。「レマガン」というのは目的になっている。

「汝が畏れ畏まれるために汝のもとには赦し（あり）」

「あり」は付けたっていいけれども。

「されど、汝にゆるしあり。人にかしこまれんために」

というのが直訳なんです。この目的は結果に訳して一向に差し支えないので、英語でもそういうのがあるでしょ。

「されど汝に赦しあり。故に人に畏れかしこまれたもう」

これは「たもうであろう」ではない。事実、十字架によるところの赦しがある。

「赦しがあるから、それはあなたへの畏信となります」

と。この「畏れる」とは「恐がる」というのではない。英語でも「フィア」(fear)とか、ドイツ語でも「フューリヒテン」(fürchten)という言葉を使っているけれども、あれは恐がるという意味ではない。むしろ日本語の「畏」という字が大事な字です。ルターの訳はいね、

デン バイ デイア イスト デイ フェアゲーブング ダス マン デイツヒ フュルヒテ
 “Denn bei dir ist die Vergebung, daß man dich fürchte.”

(しかしあなたには、ゆるしがあるので、人に畏れかしこまれる)

ルターはそのまま訳している。

7 イスラエルよ主によりて望みをいだけ。

そは主にいつしみあり、

またゆたかなる救贖あればなり。

と、もつとまた強く書いてある。この主のもとには、慈しみ——これも「あり」はない——それから、たくさんの「ペドウス」(贖い)が彼のもとにある。



だから、今の4節と7節で非常に

「罪の赦し」「贖い」「憐れみ」

という三つの言葉がでてくる。赦し、憐れみ（恵み、愛）、贖い。この三つのヘブライ語が使っている。それは汝のもとにある。この「赦し、恵み、贖い」は全くこれは十字架ですから、新約の光で読むと。

●神の恩寵を与える管

アウグスティヌスは、何も結婚をしなかったことが聖ではない。キリストは結婚を祝福しておられるんだから。ただアウグスティヌスの場合は、

「自分はもうこれで…」

といって、前の関係をやめた。彼は、アディオダトスを生んだ女性と結婚してやっていいですよ、一向差し支えない。むしろその方が福音的なんです。母親の方がちよつとカトリック的なんです。ただアウグスティヌスは、

「もう彼女が行ってしまった」

というわけで、むしろ彼は彼女に対してはトロイエ（忠実）な気持をもっているわけだ。もうあととは神さま一点張りです。むしろ彼女は可哀相な最後でしたよ。息子も17歳で死んでしまった。

アウグスティヌスは自分が結婚しなかったことをもってただ聖だなんて思っていないです、彼自身は。彼の実存の道がただそうだっただけの話。そのことは彼の別な言葉でわかる。そこが、カトリックの坊さんが結婚しないことをもって、ひとつの聖なることの条件のようにはややもすると考えているのが、むしろそこを破ったのがマルチン・ルターであるし、こちらでは親鸞だ。

「サクラメンタ ペルセ サンクタ、ノン ペル ホメヌス」

という言葉がある。神さまから与えられるところの「サクラメンタ」（秘蹟）は、「秘蹟」というものは、それ自体が聖なるものであって、人によるのではない」

と。だから、伝道者とかサクラメントを授ける人がその功德によるわけでもなければ、その人格によるのでもない。伝道者やサクラメントを授ける人たちは、神さまの絶対の恵みを、キリストの恵みを、恩寵を与えるところの樋（と）にすぎない、管（くだ）にすぎない。その人が、伝道者やサクラメントの授用者が、道德的品性が如何であるかということが問題ではない。神の恩寵は、人の道德的な善いとか悪いとか、傷があるとかないとか、そういうことには関わりなしと。そういうところに徹底的にアウグスティヌスが、

「キリストの恵みのみ」

ということを説いている。これは非常に福音的です。その点では、パウロも同じ角度です。ルターの前にかくパウロの角度をしつかりと捉まえたのは、なんといつてもアウグス



ティヌスです。ルターは、アウグステイヌスのあれほどの幅はないけれども、深さからいうと、もつとパウロに近い。

アウグステイヌスは、

「人間はどれだつてみんな罪びとにすぎないのだから、それを相対的な比較をしてどうのこうのなんてことは本当の福音ではない」

ということ、彼自身が言っているわけです。そのことは、彼がペラギウス (Pelagius) との論争でもなおはっきりとする。

ペラギウスは即ち、

「恵み十行為、信仰十行為」

という角度なんです。ペラギウスはやはり立派な人だったらしい。そして、人間の性はむしろ善であると、孟子と同じような角度の把握の仕方をしている。

そこで、アウグステイヌスがこれに対して論駁するわけです。ちょうど、ルターがエラスムスの自由意志論に対して真つ向から反対したのと同じで、アウグステイヌスにおいてはこの恵みの問題をペラギウスと論争した。もちろんアウグステイヌスの方が深いわけです。ペラギウスの言っていることは相対的な世界としては真理性をもっているでしょう。けれども、もうひとつ深い世界になると、なんといってもアウグステイヌス、福音の世界であります。

●終末的希望

詩篇130篇の、

「われは深淵から汝を呼ぶ」

という、われが深淵から汝を呼ぶが、実は、

「汝（貴神）は我を呼ぶ」

ということ。これを忘れてはいかん。我は汝を呼ぶんだが、汝（貴神）が我を呼んでくれた。人間の祈りの悲願の上には、本願がなお大きなものをもっている。我々が祈れるのは、本願の祈りがあるから。聖霊の祈りがあるからです。この声をいつか聞くことだ。そのことは、アウグステイヌスが

「トレ・レゲ」「取りて読め」

と聞いた。あれは本願の声です、子どもを通して、子どもの歌を通して。そして、聖書を開いたところが、ローマ書13章13節だったことは、これがやはり本願の示しです。これは本願が呼んでいるわけです。

「求めよ、さらば与えられん」

というのは、与えようとしておられるから、与えられる。

それから今日は、「終末的希望」という題ですが、晨を待つに、



「^{えじ あした}衛士が晨を待つにまきって私は贖いを待っている」

という。「待つ」というヘブライ語は、「待つ」という意味と「信頼する」という意味と二つもっています。「信頼」とそれから「待つ」。信頼して待っているんです。ただ待っているのではない。

「そうなるだろうか」

ではダメです。この待ち方は、信頼のこころをもっている。

「必ずそうなる」

といって待つ。

夜が更けている。けれども必ず朝はくる。地上はどんなにこの世界は、20世紀はダメになっても、神の国は必ずくる。歴史の終末においては必ず神の国が来ると。この希望がなかったら、我々の人生は虚しいですよ。ちょうど、

「キリストの復活がなかったら、信仰は空しい」

と、パウロが言ったけれども。地上でもって人生が終わりだったら信仰も空しいです。必ず我々はみんな向こう側に行くんだから、遅かれ早かれ。その向こう側に仮天国があるわけだ、パラダイスが。

「汝、今日、我と共にパラダイス！」

とキリストが言われた、そのパラダイスが待っている。パラダイスからその次に今度は、本天国が来るわけだ。本天国は歴史の終わりです。

私がいつか図で示したでしょ。こういう図を書いた。ここがこの現世で、その上がパラダイス。パラダイスへ十字架を通って入っていく。それからその終末の時期がいつだかわらんが、この時点になってこの上に大きな本天国は待っている。この最後の審判のところがここなんだ。それから本天国が来る。こっちの下の方は本地獄。その前が仮地獄。

そういう最後の時の、

「御国を来らせ給え」

という、本天国を待っている。明日が必ず来ることを待っている。しかし、必ず来ることをどうして知っているか。これは今現に、罪の赦し、贖いを受けとって聖霊が来ているから。

「聖霊が来ているから、私のうちには天国がある」

と申し上げている通りです。

「幸いなるかな、霊の貧しくせられている者、わが十字架において。天国即ち、聖

霊の我、天国はお前のうちに、お前のものである」

と。現実に私たちは御霊によって、自分の中に、また御霊を本当に宿しているこのコイノニヤの中に、天国がある。だから必ずくる。ここに保証があるんだから、ちゃんと。だから御国は必ずくる。終末的現在というものを持っているから、終末的な最後の現実がやがてくる。だから、主の祈りは本ものである。こういうことです。



●パウロ的神秘

だから、詩篇130篇の

「衛士^{えじ}があしたを待つにまぎって、私はあなたの最後の国、御国を待っています。
というのは、私の中にこの御国が来て在りますから」
ということ。

「私はキリストのうちに、キリストはわがうちに」

ということを十字架を通して――「パウロ的神秘」(パウロニッシェ ミステイク)というのは、十字架を通じてキリストと本当に一つになっているのが「パウロ的神秘」です――アウグスティヌスもその角度に入っています。それをもつとはつきり言ったのがルターですけれども。

「ルター、ルター」

と言いながら、今度は聖霊がどこかへ行ってしまったているのが、今のプロテスタントだよ。それで「何々主義」とか言っている。「無教会主義」とか。すぐ無教会の悪口を言って申し訳ないけれど。

聖霊が入っていれば、なぜ私のことをそうだと言わないのですか。無教会の人はいつも私になにかベールを掛けている。会えば別に喧嘩はしませんけれども、何か一種のパリサ伊的なものを持っている。それは自分の信仰を私しているから、無教会主義というのは。なにも無教会にかぎらないよ、教会だってみんなそういうのがあるよ。それからどうか脱^ぬけてください。

私が今度は『無者キリスト』(著作集第1巻)を出したら、方々で「来てくれ」と言うから、そこらへ行つて話すけれども、はつきり言つてやるから。どこへ行つたつて私はひとつも恐くないですから。

パウロのこの内的構造をはつきりつかんで、そしてその現実をうちにいただいているならば、何もこわくない。そして、これはもう限りなく展開していく。私は「これでいい」なんてひとつも思っていないから。

そういうことで、どうぞ皆さんも、ことにあなた方は若いのだから――私みたいにもう70を越えてしまつて遅まきながらだけでも、あなた方は20代なんて私は羨ましくてしょうがない――ボヤボヤしてたらダメだよ(笑)。どうぞ、この福音は何としても伝えたいではいられない。簡単にまだ死ぬわけにはいかない。

詩篇130篇はそういつた、アウグスティヌスの「深淵より」という言葉で、私はアウグスティヌスというひとを思うんです。人間の賜っている知情意、どれでもいいんです。みなそれは悪くない。それを本当にキリスト中心にして動けば、何も禁欲でなくていいんです。それが本当に正しい構造でもって祝福されていく。それをこちらでは親鸞上人が、それからマルチン・ルターが福音的に本当に受けとつてくれたわけです。



「そは主にいつくしみあり、またゆたかなる救贖^{あがない}あればなり」
という7節、いい言葉だねこれ。もうどんな晴れた空よりもなお晴れやかなのがこの救い^{あずか}に与っているこの事態。さつきアウグステイヌスの十字架の舟のことを忘れないように。

● 祈り

祈ります。詩篇130篇を通して、本当に夜は更けても朝は必ずくる。この世界はどうなるうとも、あなたの御国は必ずきたる。

「御国を来たらせたまえ」

とは、本当に私たちの中にあなたのご恩寵によって御国が来ているからであります。聖名を讃え奉ります。アウグステイヌスが不思議にも、十字架の船に乗って、そして天津風、聖霊を満帆に受けとって、あなたの御示^みし、昼は太陽となり夜は星となつて導いてくださるところの事態を新しく受けとりまして、まことに感謝であります。どうぞ、我々はそのような航海をして、御国に至り着くことができますように願ひ奉ります。

この兄弟姉妹たちとこの福音を受けては、もはや何ものもいりません。実に私たちの賜った知識も情も意志もみなひとたび否定されながら、しかし、これはまた変質変貌して、豊かなる情となり、豊かなる知識となり、豊かなる意志となつて、あなたのものとして自在に使われること。アウグステイヌスもルターもパウロもみんなそうでした。そのようにして、神さま、本当に一切はあなたの栄光を顯すことであることができますように願ひ奉ります。それが、することが何であろうとも、そこにおいて必ずあなたの栄光の顯れることを信じて、御名を讃え奉ります。

この頃来れないところの兄弟姉妹たちがありますが、どうぞ、いついかなる時も本当に立ち返つて、

「いやこれは本当の福音であつた」

と、御名を讃えることができますように願ひ奉ります。

問題は一つありません。キリストは一切の問題を解決してくださいからであります。どうぞ、そのようにして彼らを深く憐れんでくださるように願ひ奉ります。

また、きたるべき大集会を本当に西も東も待ち望んでおります。どうぞ、京都のO君たちの、また信州の人たちの群れと共に、鹿沢集会を本当にハレルヤをもつて迎えまた終わることができまますように願ひ奉ります。

この兄弟姉妹たちはまた、夏はいろいろ課題をもっていると思いますが、どうぞ、それをすべてあなたの力をもつてなしとげ、また祝福してくださいさるように願ひ奉ります。尽くしませんが、心からの感謝と讃美と願いと、御名により捧げ奉る。アーメン。

